

財団法人松江市教育文化振興事業団  
**埋蔵文化財課年報Ⅸ**

平成16年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

## しぶがだに 渋ヶ谷遺跡群

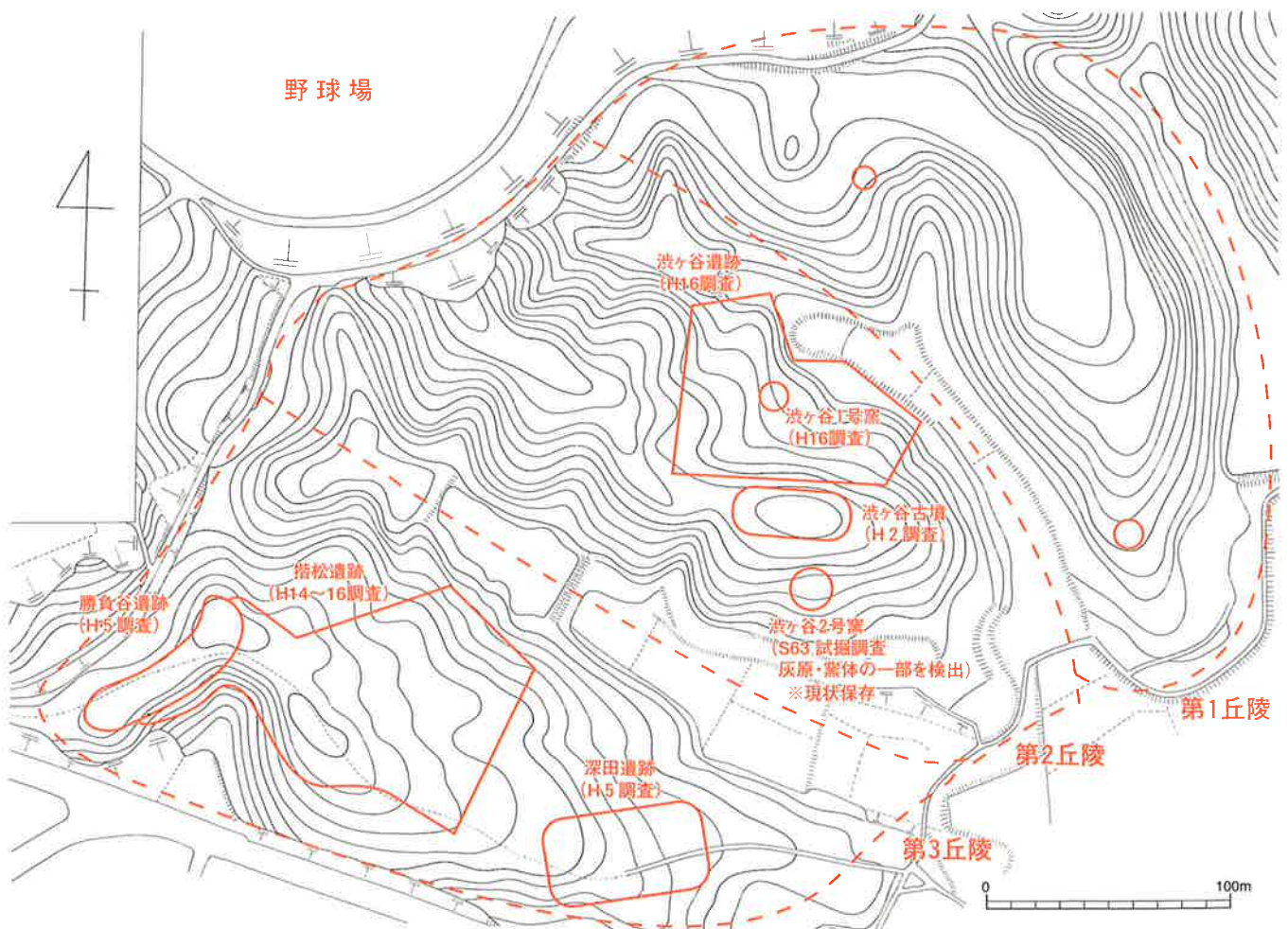
渋ヶ谷遺跡群は松江市大庭町にある総合運動公園の隣接地内に位置する。遺跡群は北西—南東方向に派生する3つの低丘陵に所在し、昭和60年・平成2年にわたって試掘調査が行われた。また平成2年・5年には本調査が行われている(渋ヶ谷古墳・深田遺跡・勝負谷遺跡)。

渋ヶ谷遺跡・渋ヶ谷1号窯は中央部の丘陵(第2丘陵)、措松遺跡は西端の丘陵(第3丘陵)それぞれに位置している。措松遺跡に関しては平成14年度から継続して調査が行われている。

## しぶがだに 渋ヶ谷遺跡

渋ヶ谷遺跡は南北に派生する丘陵部と標高44m~28mの北向き斜面が存在する。北向き斜面は非常に風化しやすいシルト質の地山で、遺構の残存状況は悪かったが、加工段4ヶ所、加工段の可能性のある遺構1ヶ所、溝状遺構1ヶ所、小炭焼土壌9ヶ所を検出した。加工段は柱穴と思しきピットは検出したものの、柱の配列や規則性などが見出せないため、明確な建物が建っていたかは不明だが、建物が建っていた可能性はある。

谷部は比較的緩やかな斜面である。加工段2ヶ所、溝状遺構4ヶ所、小炭焼土壌3ヶ所、多数のピット



渋ヶ谷遺跡群各遺跡位置図



トを検出した。なかでも1つの加工段は比較的残存状況が良く、床面には持ち運び式の竈約半個体分が残っていたほか、6世紀前半の須恵器片や時期不明の土師器片多数が出土した。これは後述する渋ヶ谷1号窯の時期と符合し、その関連が注目される。

丘陵部には建物跡が想定可能な加工段4ヶ所、想定できない加工段が5ヶ所、ピット列をとなう加工段1ヶ所、3間×3間の掘立柱建物跡が3棟（うち1棟は削平されているため確定はできないが）、竪穴住居1棟が検出された。その他、溝状遺構や土壇、焼土壇なども検出されている。

建物が想定できる加工段の中で下の写真に見られるような焼失？したと思われるものが確認されている。焼土や炭化物が多量に確認され、特に北東隅の壁面には焼土痕が明確に残っていた。しかし焼土や炭化物が住居址全面に見られず、焼失したものなのか、もしくは一部だけ被災したものかは不明である。出土した須恵器の形状から7世紀前葉の遺構ではないかと思われる。

また丘陵部を大規模に削平して平坦面を作り、掘立柱建物？を作っている。特徴的なのは柱穴と思われるピットの中に、平面形が隅丸方形をしたものが多数あり、なぜこのような形になったかは今のところ不明であり、現在検討中である。出土遺物から6世紀末から7世紀初頭の遺構ではないかと思われる。

竪穴住居は規模が4.5×5.0mを測るもので、平面形はほぼ正方形を呈する。中央に焼土が確認され、その両側に柱穴と思われるピットが検出された。北東隅・南東隅からは直径1m前後の土壇が検出された。用途・目的はわからない。

丘陵部から出土した遺物は6世紀後半から8世紀頃までのものが大半である。

調査終盤、ラジコンヘリによる空中撮影を行うことになった時のことである。撮影に供えて遺跡全体を清掃し、撮影を待つばかりとなった翌日に雨が降り、1週間後に再び清掃していると、今度は突然の夕立によってまた台無し。あまりの集中豪雨で遺跡に川のような流れができる始末。それ以後、再



焼土・炭化物検出状況

びの延期を経て4度目にしてようやく撮影することができた。“2度あることは3度ある”とは言え、ほとんど困り果てた。この仕事は天候に左右されるが、暑く、雨がほしい時には降らず、雨が降ってほしくない時に限っていやというほど降る。天気に泣かされた夏の調査であった。（石川 崇）



焼失？住居完掘状況

## しづがだに 渋ヶ谷 1 号窯

### [立地]

渋ヶ谷遺跡渋ヶ谷地区の東面傾斜地に位置している。標高は35.50m～37.70mを測る。

窯の北方は西から東に開く狭い谷地形になっているが、少なくとも4～8月の調査中に谷から風が吹き上がってくるような状況はみられなかった。平常時は風あたりが弱い場所である。

### [遺構]

半地下式窖窯で、主軸は等高線にほぼ直交し、全長7.3m、床面最大幅1.6m、床面傾斜角度は14°5′～16°を測り、平面形は焚口を除けば細長いUの字状を呈していた。床面は滑らかで階段状の加工はみられなかった。

この窯は残存状況が非常に良好で、古代窖窯の構築状況を知る上では絶好の窯跡であった。窯体内ピットを検出したほか炭化構築材の一部が遺存し、構築材の痕跡が天井窯体に残されていたのである。遺構から窯の構築過程を復元すると、まず窖窯の床面傾斜に近い傾斜地を選定し、窯の形状にあわせて地下部を掘る。次に、窯の中軸線上に直径8～10cmの先端杭状の柱を約4m間隔で2本打ち込んでその上に縦板をわたして主軸とする。そして、丸材や板材などの先端を杭状または切り落とし加工を施し、窯左右の地山肩部に刺し込んでアーチ状にして主軸にわたす。場所によっては床面にも刺し込んでいる。刺し込む間隔は互いが密着するくらいの間隔で、隙間を設けようとした形跡はみられない。その後、外貼粘土、内貼粘土を施し（内部天井には施さない）乾燥させ、保護土を盛って空焚きするといったところであろうか。

この窯の構築状況の中で特徴的なことは、左右にわたる構築材の密度が非常に高いということである。堅固な骨組みを作ることにより、天井の重い粘土に耐えうる構造を目指したものと思われる。このような類例は今のところ見つかっていないが、それは須恵器窯の調査例が少ないためであり、今後の調査に注視していきたい。

### [時期]

この窯は内外ともにほとんど遺物を伴わなかったため、構築・操業時期は科学的分析に頼るしかなく、その結果は6世紀前半中葉頃と判明した。灰原が検出できなかったのは、広い調査区内で焼き損じ等の須恵器がほとんど出土しなかったことから窯の稼働回数が少なかったことが考えられる。須恵器は甕の破片しか出土せず、窯形態と須恵器編年を結びつけることができなかったことは何とも残念なことである。

渋ヶ谷1号窯は、大井地区に須恵器窯が集中する以前に大庭町で操業された数少ない須恵器窖窯の1つである。以前の試掘調査で、同丘陵の端部付近で5世紀末の須恵器窯跡が発見されており、この丘陵にはほぼ同じ時期に少なくとも2基の窯が構築、操業されていたことになる。

(江川幸子)





渋ヶ谷1号窯全景（東より）



構築材の痕跡



## くぐり まつ 措 松 遺 跡

平成13年度から継続して行われている遺跡で、前年度までに上端幅が最大で16m、深さは最大で1.8mを測る溝状遺構（大溝と呼んでいた）、溝内に円形土壇（楕円形や不整円形もある）を持つ溝状遺構などが検出された。本年度は大溝の追跡調査を中心に行われた。

前年度まで“連続ピットをとこな溝状遺構”は“波板凹凸面”と呼ばれる道路遺構の一部ではないかと思われる。“波板凹凸面”の用途としては

- ① 路床構築痕跡（作道に伴う工法）
  - ② 枕木等の痕跡（道路の利用形態に関わる痕跡）
  - ③ 通行痕跡（自然発生的なもの）
- などが考えられている。

本遺跡の場合、地盤の状況から①路床構築痕跡と考えられる。この場合、道路が水の流れによって削られるの防ぐとともに、補強するという側面を持つ。ピットの土層から粘質の土が確認されている。ピットはあらかじめ埋められており、しかも透水性のある土を入れることによって水を吸収しやすくしている。

本遺跡で確認されたこの遺構は斜面が多く、通常では水の流れによって底面が削られてしまうことが想定される。そのため斜度のきつところではピットが深くなり、斜度があまり無いところではピットは浅い。斜面を登りきってしまうとなくなってしまう。

“大溝”と呼ばれた遺構は結局、本年度の調査範囲の中で消滅してしまった。用途は道路として使われていたと思うが、途中の土層で見られた“水平堆積層”の謎はわからないままだった。

この遺跡は当初“古代山陰道”の一部ではないかと思われたが、調査を進めていくうちにその期待は外れていった。確かに出雲国府から古代山陰道に推定される松本古墳群（松江市乃木福富町）を直線で結ぶと近辺を通ることになる。しかし道幅が狭く直線的ではないため、“官道”とは言い難い。遺跡の南側を走る道路の近辺ではないだろうか？

ではこの遺跡は、ということだがあくまでも想像ではあるが、この丘陵（第3丘陵）周辺に何か施設のようなものがあって、“官道”からその施設に向かうための進入路ではなかったのだろうか。遺構に伴うものではないにしろ、遺物は道路遺構にしては多く、また前年度には土馬も出土していることなどから施設があってもいいのではないだろうか。現代的に言えば、高速道路でサービスエリアに入るための進入路ではなかったのではないだろうか。

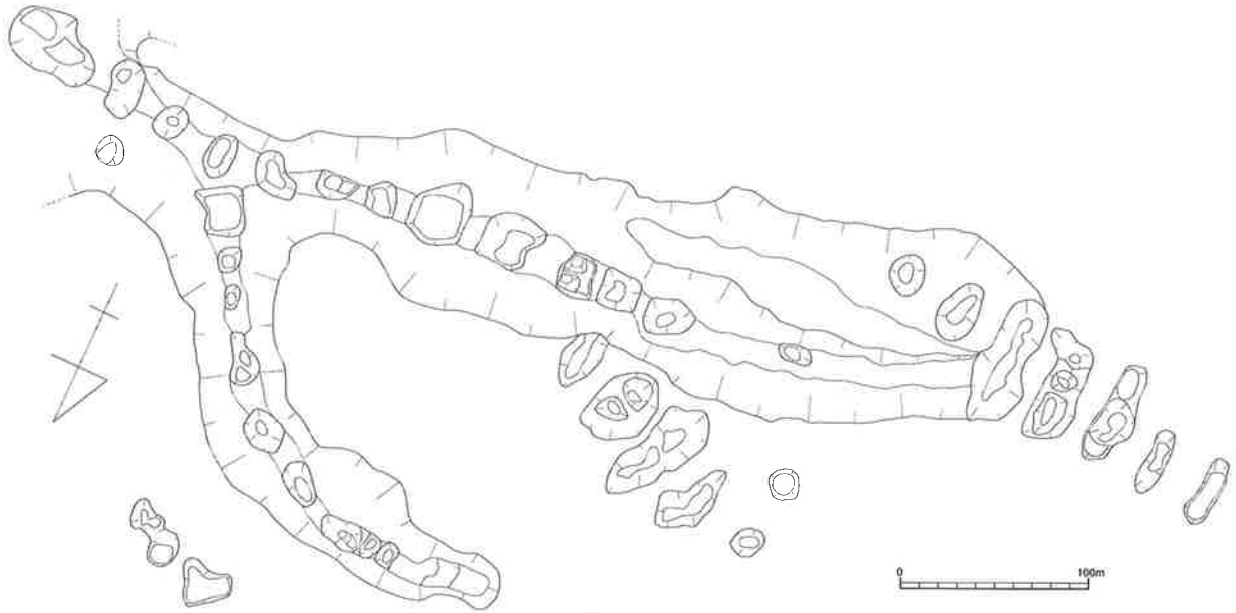
この冬は“暖冬”と言われていた。喜んでいたのもつかの間、現実には寒い日々が続いた。“暖冬”とはいえ、冬は寒い。あたりまえと言えばあたりまえのことだ。風が異常に冷たく、きつく吹いたときには写真撮影用の足場からの撮影も怖い思いもした。

前年度も同じような時期に調査だった。屋外の温度計



調査指導会風景

が-5℃を示した時には、南京錠の鍵穴が凍ってしまったこともあった。鍵が開かないと中には入れず、同僚と手で鍵を暖めて溶かして鍵を開けたことがあった。そういうことはあまりしたくないものである。  
(石川 崇)



波板凹凸面平面図



波板凹凸面完掘状況

## やま づ 山 津 窯 跡

山津窯跡は松江市大井町に位置している。平成13年度より継続的に調査を実施しており、平成13年度にA区～D区を、平成14年度にE～F、H～N区を、平成15年度にJ-2区を、平成16年度にH-2区を、平成17年度にG区をそれぞれ調査した。既応の調査に関しては各年度の年報をそれぞれ参照していただきたい。

この事業は平成17年度末に報告書刊行を予定しており、現在、出土遺物の整理に追われている。平成16年度の現地調査（H-2区）の内容については、昨年度の年報において既に概報済みなので、ここでは整理作業の進捗状況を簡単に報告しよう。

山津窯跡・山津遺跡は須恵器の窯跡、つまり須恵器を作っていた場所とその周辺なので大量の須恵器が出土した。現在の総数はコンテナ（長55cm×幅38cm×深18cm程度）で約819箱もの量が出土している。内訳はA区5箱、B区1箱、C区23箱、D区10箱、E区46箱、F区36箱、G区33箱、H区468箱、I区143箱、J区48箱、K区0箱、L・M・N区6箱であり、この他にコンテナには納まりきれない大甕4個体、置き場に困る窯壁片が30箱程ある（以上は現時点での概数なので、最終的には変化する可能性あり）。このうち、実測用に選別したコンテナ数に限っても、A区1箱、B区1箱、C区8箱、D区2箱、E区6箱、F区10箱、G区10箱、H区67箱、I区10箱、J区8箱、L・M・N区1箱もの膨大な数で途方に暮れてしまう量である。一時は土器の重みで、仮置きしているプレハブの底が抜けてしまった程だ。

さて、出土遺物の整理は主に次のような順序で行う。

- ① 先ず土のついた土器を洗い（洗浄）
- ② 出土状況が分かるように、土器そのものに細かいデータを書き（注記）
- ③ バラバラの土器をジグソーパズルのようにつなぎ合わせ（接合）
- ④ その中から報告する土器を選び出し（選別）
- ⑤ 選んだ土器の細かな図面を書き（実測）
- ⑥ 実測した図面を報告書のどのページに載せるか割付し（レイアウト）
- ⑦ 最終的に綺麗に製図する（トレース）。

また、これとは別に遺物写真の撮影、現場の図面や写真の整理もあり、文章を書く段になると、事務的な手続きの他にも、類例を調査するなど出土した遺物の調査も怠るわけにはいかない。

こういった作業を調査員1名、補助員1名、内業作業員4名で行わなければならないので大変である。日数や予算はかぎられており、泣き言は許されない。少しでも時間を短縮するため、洗浄は外業作業員さんと共に近くの川で洗い、注記は注記マシーンという機械を使用した。

それでも、最終的には昔ながらの手作業である。幸いにも、優秀な補助員さんや内業さんに支えられ、16年度には洗浄、注記作業を終え、実測も大部分終了することができた。まだまだ、作業は山積みであるが、17年度も報告書刊行に向け、鋭意、努力中である。

（藤原 哲）





土器の実測……………図化の仕事はセンスが問われます。



接合と注記……………機械があっても最終的には人の力が頼りです。

# く 傳 遺 跡

【所在地】 松江市比津町567番地

【調査原因】 宅地造成（民間）

【調査期間】 平成16年10月～12月

## 【調査の概要】

本遺跡は、標高30m余りの低丘陵に囲まれた北に落ちる谷の東向き斜面に立地している。調査前から緩傾斜の目立った5箇所から加工段が見つかり、それぞれに掘立柱建物跡を検出した。建物の総数は少なくとも7棟あり、そのうち6棟は6世紀末頃のものであり、1棟は9世紀後半頃の可能性があるものである。遺物は、それぞれの加工段および遺物包含層から須恵器、土師器などの土器類を中心にコンテナ約20箱分が出土した。

加工段は斜面を「コ」の字形に掘り込んで平坦面を造りだし、壁の直下に排水溝を設けている。平坦面に盛土が施された箇所も見られた。

## ○ 6世紀末の建物跡

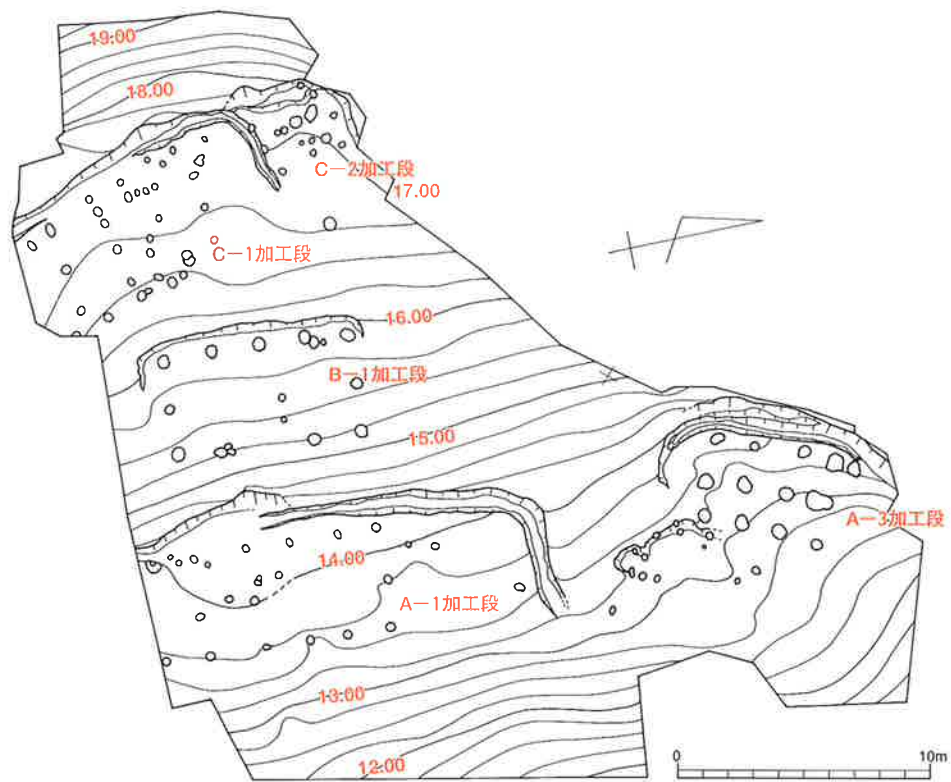
4箇所の加工段（A-1、A-3、B-1、C-1）に延べ6棟（同時期には最大5棟）の掘立柱建物があり、そのうちA-3加工段の1棟は高床倉庫で、残りは住居だったものと思われる。出土遺物は須恵器、土師器などの土器類が大半で、食膳具、煮炊具、丹塗りや手捏ねの祭祀用品などの種類があるが、住居5軒分にしては食器も煮炊きの道具も数が少なく、おそらく何かの事情で他の場所へ移動し、短期間で廃絶したものと考えられる。

## ○ 9世紀後半代

C-2加工段に想定した遺構は、柱穴の小さな床面積の狭いもので、日常生活に耐えられるとは思われず、遺物も少量である。平安時代人がこの谷奥で何らかの活動を行ったのは確かであるが、その詳細について明らかにすることは困難と言わざるを得ない。

現在のところ、久傳遺跡の周辺では比津小丸山古墳（全長26mの前方後方墳、未調査、時期不明）を除いて遺跡がほとんどわかっていない。今回、古墳時代後期の集落の一端を明らかにすることができ、当地の古代史を語る上で大変意義深い調査であったと言えよう。（瀬古諒子）





久傳遺跡全景 (1/300)



久傳遺跡全景 (東から)

# むこう やま にし 向 山 西 遺 跡

[所在地] 松江市古志原7丁目1770-1

[調査原因] 宅地造成(民間)

[調査期間] 平成17年1月～3月

## [調査の概要]

本遺跡は標高38m余りの丘陵上に立地している。丘陵頂部と斜面から弥生時代後期初頭の竪穴住居跡2棟と加工段1箇所、中世墓と思われる土壇2基、時期不明の落とし穴3基、焼土壇1基、道の跡と思われる溝状遺構1条が発見された。

### ○弥生時代の遺構

#### 竪穴住居跡1 (S I-01)

床面直径4.8mを測る円形の竪穴住居跡で、周壁の直下には壁体溝が一周し、北西の壁を穿って排水溝が付設されている。主柱穴の痕跡は不明瞭で、柱は床に直に立てられていたか、数センチあったごく浅い柱穴を精査の段階で削ったかもしれない。しっかりした主柱穴を持たないこの竪穴の場合、上屋の構造が問題である。遺物は後期初頭の甕片、磨石などが出土した。

#### 竪穴住居跡2 (S I-02)

床面直径6.6mを測るかなり大形の円形竪穴住居跡である。主柱穴は6本あり、深さ70cm前後のしっかりしたものである。床面中央部には中央ピットがあり、底には有機質の腐植層が数センチ見られた。遺物は埋土上層から土器小片が出土しただけであった。

### 加工段

緩斜面に溝を切り、その谷側に平坦面を設けたものである。平坦面に柱穴は見当たらなかった。簡単な施設と物置場所、作業場所などの機能が想定される。

### ○時期不明の遺構

#### 中世墓? (SK-01・02)

直径30cmと50cmの小土壇で、中から鉄さびの付いた炭の塊と鉄の角釘が出土した。いずれの穴も焼けた形跡はなく、穴の周辺にも炭は出なかった。他の場所に入れ物ごと焼いた後この場所に穴を掘って埋めたものである。八雲村谷ノ奥遺跡の例から中世墓ではないかと思われるが人骨は確認できなかった。

#### 落とし穴 (SK-03～05)

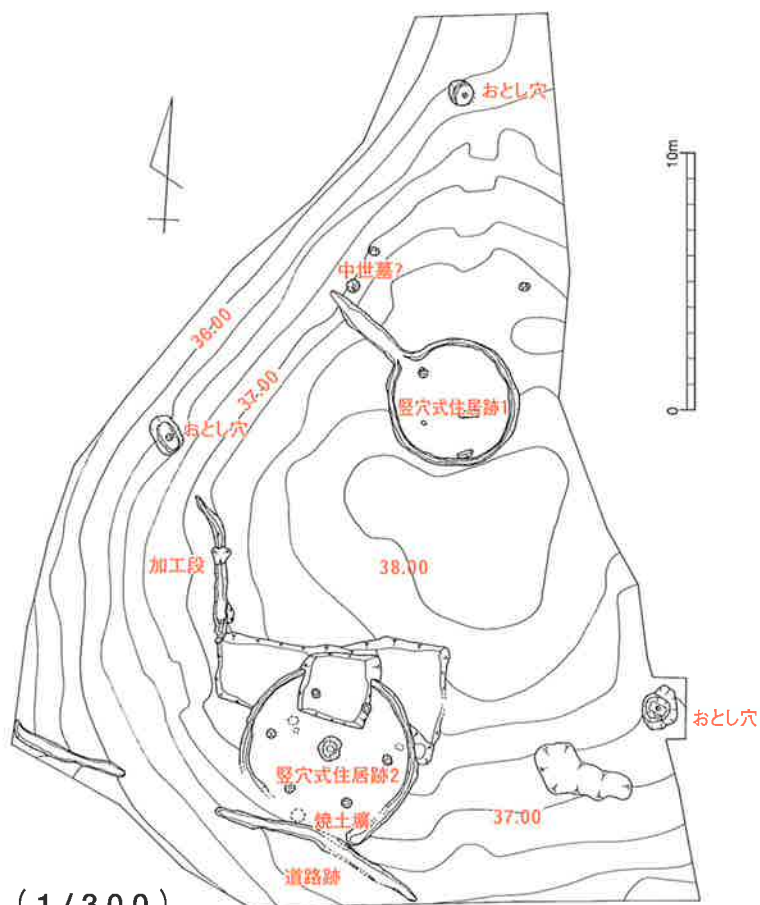
いずれも底面の中央にピットが穿たれていた。遺物は出土せず、時期は不明である。

丘陵頂部で検出した2棟の竪穴住居と加工段1箇所は切り合いがなく、その位置関係から見て同時期に併存していたものと想定してみたが、竪穴住居跡2棟の作りは円形で壁体溝を持つこと以外に共通点が見出せず、規模、主柱穴のあり方、中央ピットの有無、屋外排水溝の有無など相違点が目に付く。どんな建物が建っていて、どう使われていたのか、またこの風の強い丘陵上の、しかも生活用水を



わざわざ運び上げねばならない不便な場所に立地しているのはなぜかなど、今後問題にしていかなければならないことが数多くある。

(瀬古諒子)



向山西遺跡全体図 (1/300)



向山西遺跡全景 (東から)